



外国人観光客の訪日数は、昨年暮れようやく 1000 万人を実現した。政府は、訪日外国人数を、2020 年の東京オリンピック開催に 2000 万人、2030 年には 3000 万人にするという行動計画をまとめている。この倍増計画は、本当に実現可能なのか。今回は、観光立国を実現化させるための課題について考えてみる。最初は、『日本の夜は早い』問題について検討することにする。

訪日外国人観光客数の 2000 万人達成目標とは

政府の観光立国推進閣僚会議は、2013 年 6 月に、「2030 年までに訪日外国人数を年間 3000 万人とする」行動計画をまとめた。東京オリンピックの開催年の 2020 年に、2000 万人を目標としている。

そもそも、訪日外国人観光客数をこのように大幅に拡充しようとする国家プロジェクトは、どのように始まったのであろうか。

それは、2003 年 1 月に、当時の小泉首相が施政方針演説で、当時約 500 万人であった訪日外国人旅行者数を 2010 年に倍増させるとの目標を打ち出したのが、最初といってよい。この時展開したのが、「ビジット・ジャパン (VJ) キャンペーン」である。

この倍増計画は、その後、「2020 年に 2000 万人達成」と拡大された。2009 年に発足した民主党政権で国土交通大臣に就任した前原誠司は、この目標を 2016 年に前倒しにする方針を示した。目標数値の上乗せだけが先行したのである。

この最初のメルクマールとなるのが、訪日観光客 1000 万人達成であった。しかし、その目標達成の年の 2010 年には達成不可能となった。この時、マスコミは政府の見通しの甘さを強く批判したのである。

この 1000 万人の目標は、当初の予定より 3 年遅れ、2013 年 12 月 20 日に達成した (JNTO 調べ)。「苦節 10 年」の歳月をかけて、ようやく達成できたというのが、本当のところといってよい。

しかも、これまでの経緯からわかることは、日本政府や中央官庁・自治体の努力以上に、

東南アジア諸国の成長という政治・経済的事情に恵まれたことが、1000万人達成の大きな要因になったとみてよい。

これまでの政府による外国人観光客の倍増計画を見てくると、東京オリンピック開催時の2000万人達成の目標は、かなり厳しいといわざるを得ない。この実現には、外国人観光客の受け入れ体制の抜本的な見直しが求められざるを得ない。

日本の夜は早すぎる

最初に問題提起したいのは、「日本の夜が早い」という問題である。観光客は、限られた旅行の日々を充実したものにしたい。朝から夜まで観光を楽しみたい。もちろん、朝はゆっくり、夜は早く休みたい観光客もいる。

日本全国どこでも一年間通じて、「夜が早い」のである。観光地の神社・仏閣は、夕方の4時から5時の間に閉まってしまう。日が長い夏の時期も例外ではない。神社仏閣だけでなく、お土産屋さんや食事処も閉まってしまう。明るいうちに、観光客は行き場所を失ってしまう。これは、商いの店にとっても観光客にとっても、不満なはずである。

2014年6月20日の日本政府観光局(JNTO)によれば、この4月の外国人旅行者数は、前年同月比33.4%増の123万2000人となり、過去最高を記録した(JNTO調べ)。これは、タイ、マレーシア、インドネシア、ベトナムといった東南アジアからの訪日観光客が、急増したことが大きい。

東南アジア諸国の夜は、賑やかで楽しい。台北、上海、香港、シンガポールなどの観光地では、地元の人を含め、夜遅くまで楽しんでいる。台湾では、夜市が有名である。寺院も夜遅くまで、地元の人々が参拝している。市内の各所で夜市が開かれ、夕暮れ時から深夜まで、客足は途絶えない。観光客も、それを目当てに夜市を楽しむのである。

夜の生活を楽しむことが当たり前の東南アジアの人々にとって、日本の夜の早さと街並みの暗さは、異様に映る。

夜が早いのは、日本有数の観光地も例外ではない。たとえば、奈良や鎌倉である。年間約1900万人が訪れる鎌倉も、夜が早い。このため、日帰り客が大半であり、宿泊客はたったの2%に過ぎない。首都圏の観光地とはいえ、あまりにひどい数値である。

奈良の観光もひどい。ネット上では、「大仏商法」といった批判的な書き込み記事が目立つ。海外のガイドブックにも、「奈良は3時間で十分」と書かれる有様である。夜が早い奈良は、観光客の93%が日帰り客で、奈良は素通りするだけになっている。

鎌倉や奈良の夜を明るくするには、なによりも、神社・仏閣と地元民の協力が不可欠とあってよい。神社・仏閣の拝観時間の終わりを、せめて日没まで延ばすことが必要である。夏のシーズンであれば、夕方の7時までには少なくともオープンにすべきであろう。

奈良で2010年に開催された平城遷都1300年祭の際、真夏でも神社仏閣は4時から5時に閉まってしまった。観光客は、夕方以後の行き場を失った。自治体ならびに地元商店街などからの神社・仏閣への働きかけ、協力を取り付ける努力が不可欠とあってよい。

夜間まで拝観時間を延長することには、賛否両論がある。1990年代前半に、夜間の参拝やライトアップを始めた京都の神社・仏閣でも、試行錯誤が続いた。今回は、この観光地での夜景問題について、検討することにしたい。(続く) (TadaakiNEMOTO)